

山田功から辻二郎そして寺田寅彦へ

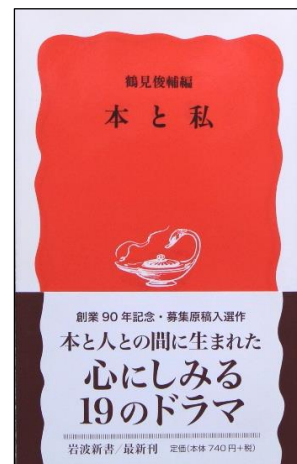
千葉 明

1. ことの始まり

寺田寅彦記念館友の会副会長の山田功氏は元物理の高校教師で、寺田寅彦本の読み方について色々示唆に富む文を発表されている他に、寅彦文に関連する物理実験についても取り上げるなど、ユニークな優れた科学教育者である。私には氏の寅彦に関する文と言えば岩波新書の鶴見俊輔編『本と私』の中に取り上げられている「寺田寅彦の自装本」も、短文ではあるが心に残る文である。

また氏は中谷宇吉郎雪の科学館友の会幹事でもあって、中谷宇吉郎関連の資料の調査研究にも詳しく、さらに氷の偏光写真などについてもしばしば会報『六花』に発表している。

この度その山田氏の氷の偏光写真を見ているうちに、手元にある辻二郎の『光と力』（春陽堂）に偏光についての詳しい説明が述べられていたことを思い出し、改めてこれを取り出して読んでみると、この中に使われている多くの写真は理研科学映画株式会社の提供によるものとあるし、文の内容が辻と寅彦に関係のある理化学研究所における研究成果についても詳しく書かれてある。さらにこの記事から、『思想』寺田寅彦追悼号（岩波書店、昭和 11）に辻の寄稿文のあった事を思い出し、これも改めて読み直すとは何と辻と寺田寅彦とはかなり親しい間柄にあり、しかも映画という一点で結ばれている場面がありそうなが考えられた。



〔 山田功が敬愛する寺田寅彦について書いている本 〕

『榊』では、これまで辻と寅彦について論じられた寄稿文はなかったように思われたし、また、寅彦の映画論についても論じられたことがないように思われたので、少しこれを調べてみようという気になった。はじめのうちは、軽い気持ちで辻の随筆本を読んでいたが、実は辻には主に科学的問題を扱った随筆集がかなり多くあることもわかり、興味がわくまま、古本でも全部購入して読もうという気になった。辻は工学が専門で、専門書の著作は勿論あったが、一般人向けの随筆集が 9 冊あることがわかり、これを古書店から全部購入する計画を立て、比較的短日月でこれを達成することができた。

購入できた本は次の 9 冊である。

- (1)『西洋拝見』（岩波書店、昭 11）
- (2)『偏光鏡』（岩波書店、昭 11）
- (3)『単色燈』（岩波書店、昭 14）

- (4)『回転鏡』(誠文堂新光社、昭 18)
- (5)『光と力』(春陽堂、昭 18)
- (6)『科学談義』(叢文堂、昭 23)
- (7)『東西今昔譚』(日刊工業新聞社、昭 29)
- (8)『科学と非科学』(日刊工業新聞社、昭 29)
- (9)『研究者の手記』(大松堂書店、昭 41)

これらの本を通読した結果、辻と寅彦は、映画の作製や映画評論について深い関心を持っていた事、さらに田中館愛橘や田丸卓郎が提唱し、寺田寅彦も実践した国語のローマ字表記に辻も深く共鳴し、これに関する随筆も多く書かれていることがわかった。

考えてみるに辻という人物は工学が専門なだけに、一般人向けの科学的な文章を書くにしても、理学系の人たちとは違ってあまり目に付き難かったのではなかったかと私には思われたが、これはどうであろうか、それともかなり多く読まれていたのであろうか。



〔光学の教科書のような
辻二郎の科学随筆本〕

2. 辻二郎の人物像

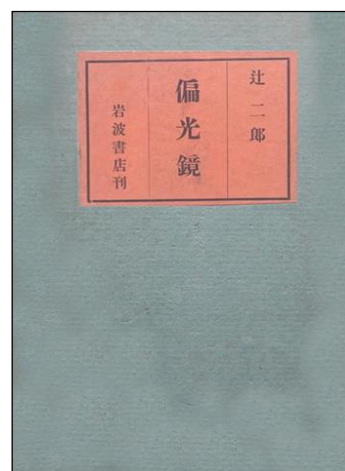
ところで辻とはそもそもどのような人物であったか、略歴を見ることにする。

【辻二郎略歴】

- ・明治 29 年東京生まれ。旧制一高から東大工学部卒業。工学博士。
- ・理化学研究所主任研究員。副所長を経て東京理科大学教授。
- ・日本機械学会。応用物理学会。精密工学会。日本工学会各会長。
- ・光弾性実験、光波干渉計等の研究で学士院恩賜賞、紫綬褒賞受賞。
- ・初代国家公安委員長。勲一等瑞宝章受勲。
- ・昭和 43 年死去。

このように学術研究に関して輝かしい経歴を持っている人物である。

ここでまず、辻が師の寺田先生などの名を冠にして書いた文章はどの位あるかをみると次の 5 編であった。



〔 辻二郎の科学随筆本 〕

- (1) 「吉村冬彦氏の『蛍光板』」(帝国大学新聞、1935.9.9)
- (2) 「寺田先生の思出」(帝国大学新聞、1936.1.20)
- (3) 「寺田先生を偲ぶ」(『思想』寺田寅彦追悼号、1936.3.1)
- (4) 「寺田博士と随筆」(『社会及国家』 1936.11.3)
- (5) 「寺田先生とコーヒー」(『読書の眼』帝国大学新聞社、1937.11.15)

これらの文は1935年から1937年にかけて書かれているものであるが、この大部分は『偏光鏡』に再掲されている。しかし辻の随筆集の数からみればこの話題名はあまり多くないので、寅彦と辻の関係について注目した人は多くなかったのではないかと私は考えさせられた。

3. 映画に関する寺田寅彦と辻二郎

ここで私が辻と寅彦の関係を少し詳しく調べたいと思う直接の動機になった辻の文を引用したい。それは先に触れた『思想』寺田寅彦追悼号の中の文である。

「映画の批評家としての先生の声明は既に定評があるが、自分がかつて先生に自分の道楽の経験等を御話して、御自分で16ミリを写して映画を制作される御意志は無いかと云う事をうかがってみた事がある。先生は「実は夫は是非やってみたいと思って居る。然し映画の監督をやったり、撮影をすると云う事は、非常に体力を要する事で、時には高い塔の上に登ったり、危険な橋も渡らねばならない。やってみたいけれど、もっと若い元気な人でなければとても体が続かなくて出来そうも無い」と云って居られた。そして「君が写して呉れるのなら僕はシナリオ位書く」と云われたが、先生のシナリオは遂に拝見する機を失ってしまった。」と書いている。この文を改めて読んで、私は辻と寅彦は映画という話題で結びつく所が出て来るのではないかとふと考えた。

そして寅彦が映画を作る事に強い関心を持っていた事がこれでわかるが、それで実際寅彦が映画に関しての文をどれだけ発表しているかを調べてみた。

これは『寺田寅彦全集』(岩波書店1950)によると、

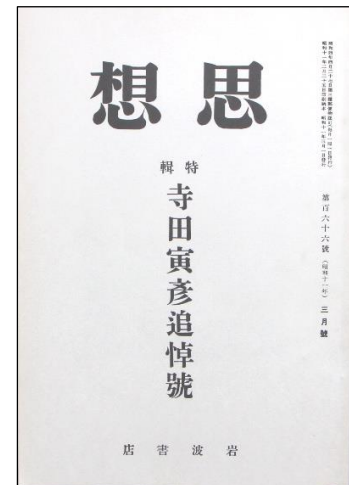
- 3巻 「映画時代」他 計6題
- 4巻 「映画雑観(Ⅱ)」他 計3題
- 5巻 「映画雑観(Ⅲ)」他 計5題

が載っている。

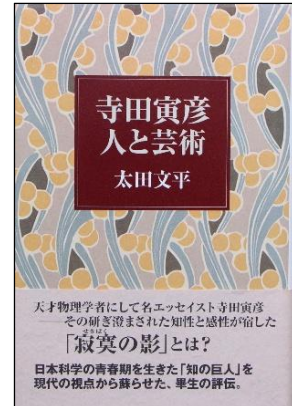
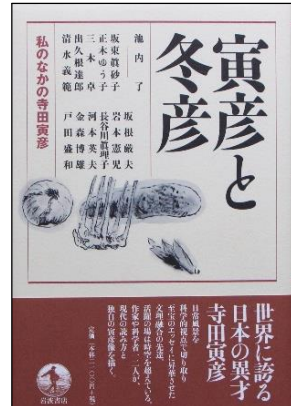
これらの文は『キネマ旬報』や『映画評論』のような映画専門誌にも寄稿されている本格的映画評論が多い。

そこでこれらの寅彦の映画評論文について考察している人は居ないかと、これも手元にある本から探すと、つぎのような人々の文があった。

まず池内了は『寺田寅彦と現代』(みすず書房2005)の「科学と芸術」に於いて、映画についての寅彦の行動について詳しく考察しているし、寅彦の編集本『懐手して宇宙見物』(みすず書房2006)では寅彦の「映画の世界像」を取り上げている。さらに『寅彦と冬彦』(岩波書店2006)の編集書では、その中に岩本憲児の「軽快な俳諧としての映画」と題して寅彦の映画論を取り上げている。岩本には「寺田寅彦と映画」(『文学研究科紀要』第29輯、早稲田大学(1983))という研究報告があるとも記されている。



『思想』
寺田寅彦追悼号



〔寺田寅彦の映画論について論じている池内了と太田文平の著書〕

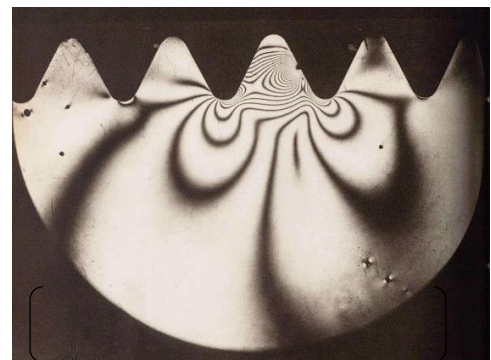
一方忘れてならない一冊に、太田文平の『寺田寅彦 人と芸術』（麗澤大学出版会 平成4年）がある。ここでは「よき時代のよき映画評論」と題して書かれているが、その中の一部分を要約すると、「寅彦の“映画の世界像”という論文は、昭和7年に『思想』に掲載され、昭和8年にはイタリアの科学雑誌にも掲載された。このことは、わが国映画史上にとって記憶されるべきことであるばかりでなく、その優れた内容と共に世界的な「日本映画を作る」という寅彦の映画に対する愛情と希望とが、まず映画理論そのものにおいて実現したという意味で、まことに貴重なものである。」と述べている。

それでは辻は写真、映画についてどのような道をたどったのであろうか。

先に辻がその著書『光と力』の中で、一般人向けに偏光写真について詳しく述べている事について触れたが、昭和11年の『理化学研究所案内』によると、辻の研究課題の中に「高速度回転写真機の研究」や「光弾性実験の研究」などが見られ、これらの研究が将来大成される基礎研究になっているようである。

なお一般的な本では、『科学の眼 最新科学写真集』（朝日新聞社編 昭15）の中には、辻二郎の前文と光弾性偏光写真が多く載せられている。

その一方、寅彦に映画作製の興味があるかどうかを聞いた辻自身が心掛けたのは、寅彦のような映画評論という広い意味での文化活動ではなくて、あくまでも当時文化映画という範疇に入れられていた科学映画の作製にかかわる事になる。



〔辻二郎撮影 ネジに加わる内力
『科学の眼』掲載〕

辻は理研時代に理研科学映画株式会社と関係を持ち、先にあげた図書『光と力』は、理研作品の科学映画「光と力」をわかり易く説明した本であると序文に書いている。ここでは科学映画そのものに対する意見も少し述べている。では辻がこの科学映画について論じた文はどの位あるのであろうか。前記随筆集の全体についても当たってみた。

- (1) 『単色燈』『文化映画の審査』（昭14）を含めて4篇
- (2) 『回転鏡』『銀幕随想、文化映画の製作に就いて』（昭15）を含めて5篇
- (3) 『光と力』序に「文化映画について」（昭18）
- (4) 『科学談義』『映画と幻燈』（昭21）を含めて2篇
- (5) 『科学と非科学』『科学映画の今昔』（1949）を含めて2篇

このように科学映画(文化映画)に関する意見を多く発表している。なお「研究者の手記」には、映画に関する文章は記載されていないが、理化学研究所にいた多くの科学者について触れられており、寅彦

や宇吉郎についても書かれている。

ここで科学映画についての辻の説を『回転鏡』の「科学映画の限界に就いて」(昭 16. 5)から一部引用する。

「科学映画と称すべきものは以上の様な一般向きの文化映画からは、はっきりと区別されるべきものと考へ度い。この名を冠すべきものは勿論科学的な要素を持って居らねばならない筈であるが、それは撮影機自身の持つ科学的な能力だけでなく、それ以上の科学的要素を持って居らねばならない。例えば X 線を以って動物の骨格の運動を映すとか、シュリーレン法により気体運動の有様を映し出す如きがそれである。是等の科学映画の最高峰とも云うべきは、何と云っても学術上希有な事柄が画面に収められて居るということであろう。

皆既蝕の際に日蝕観測隊の活動と共にフラッシュスベクトルを時間信号と共に画面にあらわすと云う様な事、或いは毎秒六万駒の超高速度活動写真によって他の如何なる方法によっても見得ない様な瞬間現象を鮮やかに捉えるとか、かつて世界に何人もが成功しなかった人工の雪の結晶の生成過程を映画化する等のものが夫等である。是等の映画は専門の学者には非常に貴重な資料であって、興味も深いものであるが、一般の観衆には、其の原理も六ヶ敷く、予備知識無しでは完全に理解出来ない場合の方が多いのである。従ってかかる最高級の科学映画は商品としての価値はやや気づかわれるのである。然しながら筆者の観察にして若し誤りが無いならば、こうした映画に対する一般大衆の興味は予想外に大きく、理解出来る出来ぬにかかわらず、相当の反響があるものと考えられる。是は高度の文化に対する一般人士の欲求の顕れと見て差支えないであろう。かかる映画は其の国の科学の最高水準を比較的に通俗化して示す役目を持ち、国の看板ともなり得るものであるから例えば商品として割高につくにしても、映画業者はあらゆる犠牲を忍んで、又場合によっては国家或いは公共団体より進んで是を支援しても製作をなすべきものである。何故ならばかかる希有なる現象はそう無闇にあるものではなく、あった時に機を逸せず迅速に映画化しておくべきである。…」(昭 16.5)

この他辻は、科学映画についての文を多く書いているが、さらに「映画科学研究所の提唱」(昭 17)なる文を書くなど、寅彦の映画評論と共に科学映画製作に対する強い関心を示している。

はじめに触れた辻の著書『光と力』は、辻が関係して作製した科学映画(文化映画)「光と力」、これは 10 分間の短編映画であるが、この映画で説明し切れぬ内容を、もう少し丁寧に説明しようと試みたのが本書であると書いている。

つまり辻は、師の寅彦にご自分で映画を作られる考えはないかと伺ったが、自分自身も理化学研究所勤務時の研究項目に「高速度回転写真機の研究」があるし、写真機撮影にかかわる科学映画の作製にも強い関心を持っていた事がうかがわれる。このように寅彦と辻は、目標とする所はそれぞれ異なっていたが、映画についての関心は二人とも強く持っていたことを比較しながら述べた。

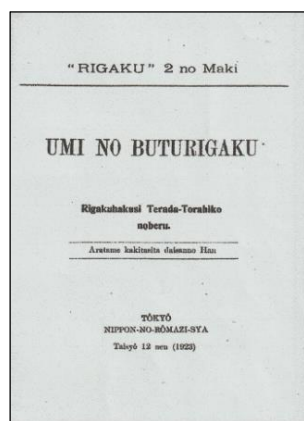
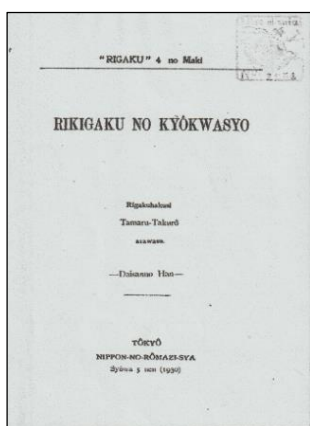
4. ローマ字国字論に関する寺田寅彦と辻二郎

次にやはり辻が東大時代から関わりのあった師の田丸卓郎や寺田寅彦と関係のある「ローマ字国字論」について述べたい。

この「ローマ字国字論」の問題については、寅彦が直接日本語をローマ字化することの必要性を説いている文を私は見たことがない。ただ『寺田寅彦全集』の第十六巻によると、「ローマ字綴り方に関する諸家の意見」の所に「日本式ローマ字の綴り方が一番合理的であり、実用的であると考えております。

(昭十年九月『言語問題』)」という記述がある。そして、『UMI NO BUTURIGAKU』を単行本として著しているのを始め、この本も含めてローマ字文での発表文は、全部『寺田寅彦全集』(第十巻 ROMAZI NO MAKI)(岩波書店)に納められているし、田中館愛橘博士とのローマ字による手紙の交換なども知

られている。



〔 田丸卓郎『力学の教科書』扉 寺田寅彦『海の物理学』扉 有名なローマ字本群 〕

一方辻は東大で田丸卓郎教授によるローマ字での物理学の講義を受けて以来、ローマ字論に心酔し、自らローマ字運動にも参画し、ローマ字論に関する文も多くその著書の中に見られる。

なお辻はローマ字文との本格的な関わりは先に述べたように田丸教授の物理学の講義を全部ローマ字でノートしたと述懐している。そこで前述の辻の随筆集の中にこのローマ字論についてどれ程度述べているかを調べてみた。

- (1) 『偏光鏡』『寺田先生を偲ぶ』(昭 11.3)

の中にローマ字運動の片棒を担ぐとある。

- (2) 『回転鏡』『国字の問題』(昭 17.7.29)を含め 3 篇

- (3) 『研究者の手記』『ローマ字談義』(昭 34.6.1)を含め 3 篇

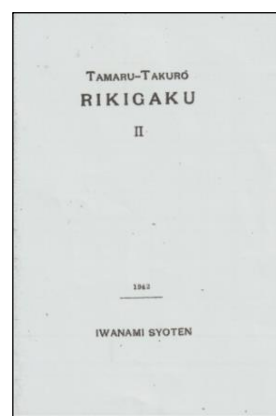
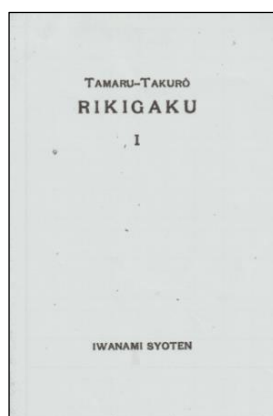
このようにしばしばローマ字問題に触れた文を書いている事がわかる。そこで辻の文の戦前のものと戦後のものを一篇ずつ、その概要を引用してみる。

まず戦前に発刊された『回転鏡』の中から「日本語の科学」と「国字の問題」の一部を引用する。

「日本語の科学的研究の業績としては故田丸博士の研究を見逃すことは出来ない。田丸先生は東大理学部で力学、音響学、弾性学等を教えていられたが、先生の講義は正確、明晰綿密を極め如何なる難解の理論も一度先生の口を通すと忽ち平易化し、聞く者を感嘆せしめ学部内外に名講義の呼声が高かった。

先生が一生を賭けられた事業がローマ字論であったことはあまりにも有名であるが、その観点から日本語、特に吾々が日常使う日本語について科学的正確さをもって研究を進められた幾多の業績があるが、例えば『ローマ字文の研究』(日本のローマ字社発行)の如きは吾々日本人自身が知らねばならぬ日本文法を明らかにしてあり、南方共栄圏等で日本語を教える場合好個の資料であろう。」

「漢字は本当にむずかしいので夫は外国人にむずかしいのみならず吾々日本人にも実にむずかしいのである。筆者は大英断を以ってトルコ文字を棄てたケマルパシャの政治家としての勇氣に絶大の敬意を表する。大東亜に君臨する日本の識者は今こそ熟慮再考すべき時である。



〔 田丸卓郎『力学Ⅰ』と『力学Ⅱ』の扉 〕

国語と国字をはっきりと区別して考える事は大切な事であって、見当はずれの国粋論は両者の混同から起こる場合が多い。」(昭 17.7.29)

次に戦後の文の一つ上げる。これは『研究者の手記』の中の「科学技術者と国字の問題」からである。

「漢字が読めない、書けないということは知識や勉強の不足からだけではなく、日本語を書き表すのに不適当な漢字を借りているということに原因があると思われる。

こうした不便を取り除くためには、表音文字を使って日本語を書き表すことが一番よいことは論をまたない。しかし、これには種々の反対論があることは、過去数十年の歴史が語っている。多年の伝統を打ちこわすとか、日本の古典が分からなくなるとか、同音異義語の判別がつかなくなるとか、等々である。そして、ほとんどすべての反対論に対する反駁は、故田丸卓郎博士の名著『ローマ字国字論』(ローマ字教育会発行)に明確に述べつくされていて、議論の余地はないと思われる。

紙面の節約のためにその一部をもここで紹介できない事は残念であるが、国字の表音化に対して少しでも異論のある人は同著を一読すれば氷解するはずである。

また、われわれ日本人自身さえ、読むこと、書くことがむずかしい漢字まじりの日本文を、外国人に読めというのは、まったく無理な話である。自分の関係する学会から、ドイツの工学会(V.D.I.)に出版物を送っているが、その会長から「貴会員の貴重な業績も、貴国の文書では皆目分からないのが残念である。」とやってきている。日本の発表論文を欧米人が読んでくれるようになることは、文字の問題だけではないことは明らかであるが、たとえ将来日本の国力がいかに強大になっても、また、わが国の科学技術が、いかに世界的に進出しても、漢字を用いる限り、日本語が広く欧米人に読まれるようになる時は永久にこないであろう。

現在の状態ではこちらが外国語を勉強して外国語で論文を書く以外に、科学者が国際的プライオリティーを主張する方法はない有様である。」(昭 35.5.30)

日本語のローマ字表記の問題は、田丸、寺田、辻らの時代とはその貴重性が変わって来ている事が考えられる。それは現在では学術論文でも AI によって、機械的に簡単に外国語に変換できる時代になってきているからである。

私にも仕事上土壌肥料関係の報文の最後に summary などを書かなければならなくて一苦労した若い日の思い出はあるが、そのような要らざる苦労はもうなくなるのだろう。

もっともこの事は小学生の頃から多くの漢字を覚える苦労の問題とは又別の話ではある。

ローマ字運動に力を尽くした先人の苦労を偲びながらこの小文を終わりとしたい。

5. おわりに

日頃、寺田寅彦を敬愛されて多くの文を書かれている山田功氏の資料から、たまたま辻二郎のことが思い浮かび、辻の随筆集を読みあさっているうちに、辻と寅彦には思っていた以上の深い絆があった事がわかり、勝手にあれこれとペンを進めてきた。

辻二郎はこれまで『榊』ではあまり話題になった事がない一人の注目すべき人物ではなかったかと思っただけであった。

私は 1997 年から「寺田寅彦記念館友の会」の会員にならせてもらい、この 2024 年 10 月で 94 歳になった北国岩手の多分ただ一人の会員で、寺田寅彦の読書ファンであるが、1997 年に職場の知人らと記念館を訪れ、伊東喜代子さんのご案内を頂いた事は、今でも忘れられない思い出の一つである。

最後になりましたが、この度の私の『榊』への投稿文につきましては、寺田寅彦記念館友の会副会長山田功様、事務局長若林章様、幹事四宮義正様に手書き原稿の活字化から校正まで、大変なご配慮をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。
(2025.1.30)